

地球一周の船旅 2016 ④

【北ヨーロッパ編】



2017年2月

旅のチカラ研究所 植木圭二

地球一周の船旅を2016年4月12日～7月26日の106日間で行ってきた。旅行記として南ヨーロッパ編に続いて、今回は北ヨーロッパ編としてイギリスからグリーンランド沖までまとめた。海でいえばドーバー海峡、北海、バルト海、そして北大西洋までに相当する。

第一章 ドーバー海峡

■ ドーバー上陸

イギリスとフランスを隔てる海峡はドーバー海峡と呼ばれており、そのイギリス側のドーバー港に寄港する。乗船前はベルギーの予定であったが、テロ事件により安全を考慮してドーバーに変更になった。そのために何も予定がなかったので私は当初ゴルフをしようと考えており船で知り合った仲間と行く計画を立てていた。

ところが妻がケガをしたので、一人では心細いというのでゴルフを断ってロンドンに行くオプションツアーを選ぶことになった。このツアーは100km先のロンドンまでバスで向かう。

イギリスは、面積は日本の2/3ほどで人口は日本の約半分である。フランスも人口は同じくらいだが面積が日本の1.5倍ある。従ってイギリスはフランスと同じくらいの人口だが、面積は半分以下ということになる。

道路を走行しているとイギリスには高い山がないことに気が付く。5月の若葉の季節ということもあり、青々した牧草地帯が延々と続く。時々かわいい家の集落があり、牛の放牧をしている。本当にのどかな田園風景である。華やかな看板やゴミなどもなくてきれいな風景が永遠と続く。ロンドン市内もそうであるが田舎街でも電信柱がなく、電線は全て地中に埋められている。

家々の特徴は煙突である。部屋の数ほど煙突があるので煙突を数えると部屋数がわかるという。現在は煙突を使って煙を出すことが環境保護のために禁止されているので煙突は飾りになっているという。

そしてちょっと面白いと感じたのは、地方都市では家は一戸建てではなく、一つに建物の中に左右対称の住宅が2つ入っている。さしずめ二軒長屋ということになる。どの家もそうっており、親戚でも何でもない二家族が壁一枚の同じ間取りの家に住む。理由はよくわからない、ガイドも知らないらしい。



イギリスは4つの国の連合王国で、イングランド、スコットランド、ウェールズ、北アイルランドからなる。ラグビーでも5カ国対抗というのがあるが、この4つの国にフランスを入れた構成になっている。サッカーの世界カップでさえもイングランドやスコットランドは別々に出場しているから不思議である。

昨年もスコットランドがこの連合王国から離脱するか否かの国民投票があり、ひょっとすると離脱ということもあるかも知れないということで話題になった。

言葉も全く違う、日本語における方言というレベルではなく別の言語というところらしい。通貨もポンド以外にスコットランドでは別の通貨が発行されているという。私たちが知っているイギリスとはイングランドであって、スコットランドや北アイルランドのことも含めた連合王国全体をよくわかっていない。

そんなこともこの船では教えてくれる。スコットランドやアイルランド出身の英語の先生がいて、寄港前にいろいろなことをトークショーで教えてくれるので、生の声を聴くことができる。

ドーバーはヨーロッパ大陸フランスへの玄関口なので、あのドーバー海峡下の海底トンネルを走るユーロスターもここドーバーを走っている。海底トンネルはユーロトンネルと呼ばれ49.2kmで日本の青函トンネルの53.9kmには及ばないがすごいものを造ったと感心する。

フランスに行く手段は鉄道、船、飛行機以外に、鉄道に自動車を積んで自動車ごと海底トンネルに行く方法がある。

日本でも昔は青函トンネルに同じように自動車を積んだ電車が走っていてカートレインなどと呼ばれていたが、今は運行していない。是非復活をしてもらいたいものであるが多分利用客が少ないことが原因であろう。それはそれで、イギリスとフランスそしてヨーロッパ大陸の国々を結

ぶという国際トンネルと、本州と北海道を結ぶというローカルトンネルではレベルが違う。需要が全く違うのである。

そんなことはわかっているのにあんなトンネルを造るのは無駄遣いといしか言いようがない。この船に乗る少し前に北海道新幹線が函館まで開通したが、これもまた採算がとれるか疑問の声が多い。

日本の政治家とはいったい何をしているのだろうか。そして毎年、返せる目途が立たない借金をして国の借金が 1000 兆円を超えるという世界で類を見ない数字になっている。

ユーロトンネルは政府資金を一切使用せずに民間のユーロトンネル社が設立されて建設されたという。

ついでに言えば日本三大無駄遣い、あるいは三大失敗というのがある。鉄道の線路の幅が狭い狭軌の導入、西日本 60 ヘルツと東日本 50 ヘルツの異なる電源周波数の導入、そして青函トンネルの 3 つである。青函トンネル以外は明治時代の国家建設の技術導入のミスであるが、青函トンネルは戦後の話である。

■大英博物館は 2 時間で見学

ツアーでロンドンの名所観光をして短時間でめぐり昼食をとったら、自由時間はもう 2 時間も無い。行けるところと言えば大英博物館である。

イギリスは国策として博物館や美術館は入場無料である。文化や芸術に対する行政や政治の姿勢がここに現れている。

大英博物館は私にとっては二度目の訪問であるが、妻も含めて同行しているメンバーも初めてどうここでここを選ぶ。とはいってもまともに見ると何日もかかるので、ポイントのみ決めての見学とする。

まずはエジプトだ。イギリス人がエジプトの発掘に多く関わっていたのでいろいろなものがここに集まっているのだが、明らかにエジプトの宝物を持ってきている。いわば盗品がここにある。そして本場のカイロ博物館よりも展示内容が良い。

有名なロゼッタストーンを見る。レプリカはいろいろなところに置いてあるが、ここはもちろん本物である。ロゼッタストーンとは石碑であり 3 段に同じ内容のことが別々の文字で書かれている。上段がヒエログラフと呼ばれる古代エジプトの象形文字、中段がエジプト後期の日用文字、そして下段がギリシャ文字である。この石碑のおかげでヒエログラフが読めるようになり、エジプト考古学が飛躍的に進んだ。それまでヒエログラフは解読できなかったからである。

日本の展示コーナーがあったので覗いてみる。埴輪、銅鐸、鎧兜、着物、日本刀などお馴染みのものが展示されている。

その中でとんでもないものが一つあり、わが目を疑う。漫画雑誌のビックコミックである。日本を代表する文化の一つというのも分からないでもないが、ビックコミックの 2016 年 2 月のものが展示されている。表紙は阪神タイガース監督の金本である。阪神ファンなら大喜びである。それにしてもどういう経緯で展示されたのだろうか、まさか大英博物館から日本に買い付けに行った訳でもあるまいが、これは謎のままにしておこう。

■ ロンドンは大渋滞

このオプションツアーはドーバーからロンドン中心まで観光バスで往復し簡単な市内観光が付いているものであるが、往路も復路も大渋滞である。高速道路は快適に走るがロンドン市街地が渋滞をしている。ドーバーから高速道路のロンドン入口のインターチェンジまでが約 1 時間なのにロンドン市街地は 3 時間、帰りはもっとひどくて 4 時間もかかる。

体調不良を訴える人もでてきて大変である。若者でも休憩なしで 3 時間のバスはつらいのに年配者が多いこの船では大変である。それでもスタッフは笑顔で振る舞う。いや、そうするしかないのだろう。

誰かがスタッフにあとどのくらいで着くのか聞いたところ、スタッフが運転手に聞く。陽気なイギリス人運転手の答えは「私もわからない、何とかしてほしい」という答えが返ってくる。あきれの限りである。

国民性も関係なしに、この状況でその質問に答えられるのは運転手だけで、答える義務があると思う。大胆な予想でもいいからあと何分くらいで着くとか言わないといけない。紳士の国イギリスで非常に落胆したひとコマである。

さて渋滞の原因はというと、今朝事故があったという説明であるが、それが帰路にも影響するとは思えない。どうも慢性的なものらしい。

暇に任せて分析すると、ロンドンの道路システムに問題がありそうである。例えば東京ではこのようなことにはならないような気がする。

東京とロンドンで決定的に違うことは首都高速があるか無いかということだと思う。街の景観を重視したのか首都高速のようなものがない。東京では都心から郊外に出る場合には首都高速を使う、それも何通りもの選択肢がある。

ここロンドン是一般道のみである。だから通勤にも使う 2 階建てバス、乗用車、タクシー、観光バスなどあらゆる車が一般道を通る。市民の足の 2 階建てバスは停留所に留まってばかりいる。

渋滞の原因を推測するも、いっこうに渋滞はひかない。周りの人はこの企画が失敗ではないかと言い出す始末である。この渋滞は予想できるもので、往復の時間が通勤通学時間と一致しており、渋滞の回避プランもない。結局このロンドンへのバス旅行企画に問題があるという結論に至る。

テロ事件の影響で寄港が急に決まったので事前調査不足は否めない。

この船は安く地球一周ができることを売りにしているので、基本費用の払い込みは他の日本船に比べるとはるかに安い。それを穴埋めするためにオプションツアーで利益を出している感がある。

今回のドーバーからロンドン往復のバスの車窓観光 30 分が付いているものの昼食なし日帰りバスツアーで一人 17000 円。40 人でバス 1 台なので全体で 58 万円、簡単に見積もるとバスの運転手付き貸し切り費用が 10 万円、ガイドが 3 万円、添乗員は船のスタッフなので 40 万円以上の粗利がある。そのバスが本日は 5 台も運航している。

今回の航海で、たまたま食事と同席した人が飛鳥Ⅱに乗って地球一周をしたというので聞いた

ことがある。乗船費用はもちろん高いが、オプションツアーは飛鳥Ⅱの方が安いという。

帰船して食事でビールを注文したら本日は出航まで出せないという。理由はイギリス当局からの指示であるという。なぜそんな指示がでるのだろうか。

多分、外洋クルーズ船が運んでくる乗客に陸にあがってお金を使って欲しいからなのだろう。なぜならば、通常は外洋クルーズ船では出航するとアルコール類に税金がかからないのでビールなどは格安で飲める。船内で飲まれては税金を含めてお金が落ちないので寄港している時くらいは陸でお金を使ってもらおうという意図だと思う。大英帝国といえども背に腹はかえられないのか。

残念ながらこの船は出航してもアルコール類の価格は日本での価格とそんなに変わらない。

■消化不良の講演

田口理穂さん、ドイツ在住のジャーナリストの講演があり参加する。テーマは「なぜドイツではエネルギーシフトが進むのか」でドイツが脱原子力発電、再生可能エネルギーにて転換した背景や現状についての説明である。そのことを知らない人にはちょうど良い内容かもしれないが、私にとっては消化不良である。

そんなこともあわせて二つのことが気になる。

ひとつは発表資料の出来が今一つで、初級パソコン講座のレベルである。一般企業では発表資料は上手に作る。視覚にまず訴えるのはプレゼンテーションの基本である。そして内容が伴えば相乗効果でさらに際立つ。ジャーナリストはプレゼンテーションで判断される訳でもないからしようがないかもしれないが、それにしても改めて企業では当たり前のことが、ここでは相当に違うということを実感する。

もうひとつは講演のターゲットや主旨の絞り込みである。ターゲットはドイツがそういう政策にシフトしたことを知らない人という設定と思うのでそれはそれでよい。問題は主旨つまり何を訴えたいかがよくわからない。

現状の説明、紹介がテーマならばそれも良いが、ジャーナリストと称する人が既に新聞やテレビで数年前から多数報道されている内容を紹介するだけではあまりに寂しい。原子力発電をなくし、再生可能エネルギーに転換することは大多数の日本人はその理想には総論賛成であろう。ところが現実的にはそのための課題が多くあり、現実と理想とのギャップで割り切れないところにいると思う。

ジャーナリストとしてその課題についての答え、あるいは答えを出すための考え方くらいは示してほしいのが感想である。

そんな消化不良の私を救ってくれたのは居酒屋の飲み仲間の S さんの質問である。

彼が質問した内容は「原子力が危険なのは技術が未成熟からでしょう。では原子力を安全に制御しうるよう技術を成熟させることは考えないのか」という質問に私は感激し、心に中で大きく拍手を送る。

原子力は最初から制御できないという前提が技術者にとっては屈辱的であり、ここを解決しないと廃炉にしても核のゴミの処分も進まない。

Sさんは単なる呑み助ではない。単に酒を飲んでいるのではなく常に勉強しているということである。

それに対して彼女の答えは全く的を射ていないのが印象的である。

何事もターゲット（対象）とテーマ（伝えたいこと）がまずありきということを再認識する。

ピースボートのクルーズディレクターとサウナ仲間のHさんの対談がある。Hさんはインターネットラジオもやっていてとても面白い人物である。そのインターネットラジオとのコラボレーションで約1時間の公開インタビューを聞く。

ピースボートの裏事情も聞くが、クルーズディレクターの彼が目指す事業の姿がちょっと垣間見える。日本人だけでなく世界中の人々とこの船を運行させたいという夢も語ってくれる。

しかし、私はもう少し違うことを期待していたのかもしれない。

第二章 北海

■ハンバーグとビール

ドイツのハンブルグ寄港で、今日は自由行動で過ごす。ハンブルグはドイツ第二の都市で港町であるが、港といってもエルベ川を河口から100kmも上ったところにある。船は大西洋からエルベ川を昨夜のうちに100km航行してきたのである。我々日本人の思っている川のスケールが全く違う。

ハンブルグ（Hamburg）を英語読みするとハンバーグで、ハンバーグの語源はこの港町にあるという。港湾労働者が考案した食べ物が広まったためにそう呼ばれるらしい。

さあ、ドイツといえばビール、そして今日はビールとハンバーグを食べに街に出よう。

本日は居酒屋友達のYさん、Oさんと私たち夫婦の4人で自由行動を共にし、電車でリュベックという人口20万人の都市に向かう。

電車の乗り方、いや切符の買い方がわからない。自動販売機がドイツ語で解読が難しい。大学時代に2年間ドイツ語を習ったのが何も活かされていない。そんな時、Oさんが地元のおばさんを捉まえて行先と人数と伝えて自動販売機の操作をお願いして何とか買うことができる。旅は言葉も重要であるが、何よりも地元の人とのふれあいが大切ということを学ぶ。電車は2階建ての比較的新しい車両で、きれいである。

日本の新幹線と同じレール幅の標準軌を採用していて日本のJRの一般車両よりも幅が広い。日本の三大失敗の一つがこのレールの幅が狭い軌道、いわゆる狭軌を採用したことにあると以前書いた。

鉄道導入するときに、日本は国土が狭いので狭軌が良いと導入責任者が判断したために全国に狭軌の鉄道網が張り巡らされてしまった。この狭軌の鉄道はアフリカなど植民地用の軌道で当然世界標準ではない。

したがって走行の安定性にも問題があり、さらに日本の鉄道技術が世界一流に進化しても車両

の輸出ができないというハンディを背負うことになる。だから新幹線は日本の鉄道技術者たちの夢であり、夢の新幹線と呼ばれることになる。

さて、ドイツの鉄道は当然標準軌で新幹線と同じ幅であるが、座席は2列+2列である。新幹線の普通車は2列+3列なので座席の幅が新幹線よりも広い。またドイツ人は長身でもあるので前後の座席の間隔も広い。左右前後ともにとてもゆったりとしている。

電車は発車の合図もベルもなしにスーと動き出す。電気自動車が動き出すような感じで何か拍子抜けする。ともかく静かである。

リューベックは世界遺産の港湾都市でハンザ同盟の盟主として君臨したそうであるが、市街地は四方を堀に囲まれた小さな街で中世の面影を残す。

いくつかの大きな教会があり、それらに立ち寄ると、どこの教会でもパイプオルガンの生演奏をしている。椅子に座って目をつぶって心を静めて聞いていると壮大な宇宙の中を浮いているかの気分になり心が癒される。隣に座った妻はキリスト教に改宗したい気持ちになるとも言っている。

そんないい思いをさせてもらいながら拝観料のようなものをとるのかと思うがお気持ちだけで結構という表示がある。いやドイツ語がよくわからないので多分そうだろうと勝手な解釈をしている。

教会以外にも昔ながらの家々も散見できるが、ほとんどは近代的な建物になっている。その理由は戦争である。街は第二次世界大戦による爆撃によって破壊され、戦後になってから教会は昔の姿に復元されているからである。

数年前に行ったドイツのドレスデンという都市も復元によって中世の街並みを再現させ、世界遺産に登録されたが、むやみに新しい建物を立てずに昔の姿を再現するという事は、歴史を大切にすることと二度とこんな破壊をする戦争という愚行をしてはならないというこの国民の強い意志を感じる。

昨日の船内で行われたドイツの紹介で、ソーセージにケチャップとカレー粉をかける料理がある。そのことを思い出し、早速屋台で食べてみる。味はソーセージとケチャップとカレーそのものの味だが、結構旨い。ビールが欲しいところだがビールを売っている店がない。ビールの本場でビールがないとはどういうことであろう。どうも午前中から飲むという習慣がないようである。朝からワインを飲んでいる南ヨーロッパの人々とは違うようである。

昼食はリューベックのオープンカフェ的なレストランでいただく。注文したのは大きなハンバーグ入りのハンバーガーである。ハンバーグはハンブルグが発祥の地であるが、アメリカ合衆国に渡ったドイツ移民がそのハンバーグをパンにはさんでハンバーガーができたという。いわば独米合作の食べ物である。そのハンバーガーを昼食にするが、パンも中身もともかく大きい。

ハンブルグに戻り、市内をぶらりと歩くことにする。旧ソ連潜水艦が置いてあり内部に入れるというところがあるのでそこに行こうとするが、ちょっと遠いので地下鉄を使うことにする。問題は地下鉄の切符の買い方やそのシステムがまた分からない。

リューベックを往復した電車もそうであったが、改札口がないのでどうやらギリシャ方式のようである。つまり有効な切符を持っていれば乗り降りの度にいちいち見せたりしないシステムで、

私が名づけた性善説立脚自動改札システムを採用している。

そして今度もまたOさんが地元のおばさんを捉まえて切符自動販売機の購入操作をお願いして、見事に切符ゲットである。

潜水艦は広島の大倉にある海上自衛隊の退役潜水艦を陸に上げて展示している「鉄のくじら博物館」をイメージしていたが、そんなに良いものではない。座礁した潜水艦を解体撤去しないで中を見学させているというもので、船体には苔が生えている。老いて退役した船をここまで見世物にしなくてもよさそうなものなのに何だかかわいそうに思えてくる。

そして入艦料が高い。広島は無料であったが、ここは 1000 円以上とる。ドイツに上陸して唯一がっかりした部分である。

夕方にはビールバーが開いていたので念願の本場のビールをいただく。この国ではビールについてのこだわりが法律にもなっている。製法上の基準などもそうであるが、グラスに注ぐ基準が決まっている。

日本ではビールの量をグラスサイズで小中大などあいまいな表現で記載されるが、ドイツでは 31cl、41cl、51cl と記載されており、各グラスにはその基準線が書かれている。その基準線よりも多くビールが入っていないといけないのである。もちろん泡を除くビールの液体部分である。日本では泡が結構多く注がれてくることがあるが、ドイツではその基準線以上ないと法律違反になる。

法律が消費者を守っているのは当たり前であるが、実は本当に守っているのはこの国のビール文化であると思う。

おっとその証拠写真を撮り忘れるところである。少し飲んでしまったので証拠写真にはならないかもしれない。



ドイツは今まで寄港してきた国の中でもっとも街が整備されて美しい、人々も親切で優しいと感じられる。何よりも街に力強さを感じられる。それは街を復元再生させる力、脱原子力へ転換する力、かつて世界を相手に戦争を挑んだ国で、そして現在は EU のリーダ格である。

戦争は二度と起こしてはならないと思うが、ドイツ人と日本人のジョークで今度やる時はイタリア抜きでやろうぜという言葉も妙に納得してしまう。

■4つの帰国方法

居酒屋とサウナ情報で、船から日本に帰国する方法は4通りあると聞く。

1 つ目は最も一般的で通常にクルーズを終えて無事に帰国すること、ほとんどの人はこの分類になる。

2 つ目は自己都合で離脱することで、これはよくあるという。先日も身内で不幸があり急きよ下船し帰国した人がある。

一緒に食事をした人から聞いたが高齢の親を日本に残してきたので、何かあれば帰国できるように帰国費用を負担してくれる海外旅行保険のオプションを付けて出てきたという。

あるいはケガや病気でこれ以上乗船不可能になり帰国するなど結構多くいるという。

また厳密には本人の意図ではないかもしれないが、寄港地で何らかの事情で帰船リミットに間に合わないために船が出航してしまうことがある。その場合はスタッフがその人のパスポートと荷物を持って待っており、帰国するか次の寄港地に行くかの選択になるという。多くは次の寄港地に行くようであるが、まれに帰国するという。やはり自己都合である。

ちなみにその時のスタッフの滞在費用や飛行機代は本人が負担するので、泣きっ面に蜂ということになる。

3 つ目は船長命令による強制下船がある。例えば船内で暴力や反社会的行為、目に余る誹謗中傷など、船にこれ以上居てもらいと他の乗客に被害がおよぶという船長判断である。

この命令は船長のみが発効できる。聞いた話では一回の地球一周クルーズでそのような人が1名くらいはいるそうである。その対象者は例えば船の中での売春行為などもあるという。

さて、4 つ目はいわゆる「無言の帰国」である。残念ながら船内で亡くなった場合や寄港地で観光中に亡くなった場合などは船を離れて無言の帰国になる。高齢者が多く乗っているなのでその確率は低くないらしい。それでも片手の指の本数には収まるらしいが、残念な帰国になる。

本日は寄港日なので下船リミットは22時であるが、22時を過ぎ救急車が船に横付けされて担架でだれか運びこまれる。程なくして再び担架に人を乗せて救急車が戻っていく。船内での医療設備に限界があり地上で治療することになったのか、それとも無言の帰国か。

この船には1000人の乗客以外に350人のクルーが乗っている。上記の4つはクルーにも当てはまるという。

船旅とは船上生活である。これだけの人数がいればいろんなことが起こる。

■緊張感のない避難訓練

緊急避難訓練が実施される。乗船中には1カ月に一回実施されると聞いていたものであり、乗船の当日そして本日で2回目になる。乗船客全員が8階の指定された場所に集まり、点呼の後に8階デッキにある救命ボートのところまで行く。

ふざけている若者、やたらにしゃべっているおばさん、さまざまである。基本的には緊張感が全く感じられない訓練である。船側としたらお客様に対して緊張感を持ってくれとは言いにくいのだろう。

そうかと思うと緊張感があり過ぎる人もいる。船内放送で言い間違いをした部分をとって、訂

正の放送がないのはおかしいと、誘導クルーにかみついている。訓練とはいえ人命がかかっているのも当然ということを手張している。私もそう思わない訳でもないが、要は言い方であり、緊張感を持ってやろうよということが伝わればいいのに、かみついてもしょうがない。

本当に様々な人が乗っている。

■波乱万丈な半生

本日またスタッフの紹介トークショーがある。この船に乗っているスタッフは波乱万丈人生を潜り抜けてきた人が多い。

20代後半の女性スタッフは小さい時に父親が事業に失敗して、裕福な家庭から一挙に取り立て屋が毎日来る家庭に変貌する。

小学生は取り立てから逃げるため3カ月に一回引っ越しをするので友達もできない。どん底の貧乏生活で両親が離婚し母親が働くために自由放任の環境になり生活も荒れ、中学では学年順位が最下位の成績になる。

母親は娘を何とかするために彼女の祖父の介護のために実家に入り、あわせて娘の監視役にあたるようになる。塾通いをするようになるとそのうちにだんだん勉強もわかるようになり、勉強をすることによって知識が増え、知らないということが人生で損をしていることがわかる。

普通の高校に入れるような学力になり、今度は自分のような子を救うために教員を目指す。見事に大学に入り教員になり、生徒に勉強を教える。

しかしそのうちに人に教えるには自分には知らないことが多すぎると感じて、地球一周の旅に出る。その縁でスタッフになるという経歴で、身の回りから人のために貢献しようという生き方を実体験から学び、その過程にいる。

もう一人も20代後半の男性スタッフで、小さい時から根暗で外で友達と遊ぶようなことはせずにおとなしい少年時代を過ごす。引きこもりが本格的になったのは15才から20才までで、極度の引きこもりに被害妄想も加わり、病院に行くが治らない。

ただし、人との付き合いは全くできないが本を読むのは好きで、雨宮かりんの本に出会う。その本には引きこもりについてポジティブに明るく取り上げていて、その本との出会いから光が見えてきたという。

そして本の中にこの船のことも書かれていたので地球一周に出ることになり、人生が変わったという。船で知り合った友人と素人漫才大会のような船内M-1グランプリに出場しグランプリを受賞する。そして彼の場合もそこから恩返しを兼ねてスタッフへ転身する。

ともかく二人とも波乱盤上の人生である。聞いている聴衆の中にはもらい泣きをしている人もいる。

人生はあらかじめはいけない。何かのきっかけで考え方が変わり人生が変わっていくことを、還暦で定年した私が改めてこの若者たちに教えてもらうとは思わなかった。

■ヨーテボリはボルボの街

スウェーデン第二の都市ヨーテボリに入港し、本日もまた居酒屋仲間のYさん、Oさん、Kち

ゃん、そして私たち夫婦で気ままな自由行動を楽しむ。KちゃんはCDも出したこともあるという元アイドルで居酒屋でもアイドルである。

港から市街地までの11kmを歩こうとする若者グループもいるが、アルチュウ（歩き中毒）の私もさすがにバスで行くことにする。この国もドイツと同じ性善説立脚自動改札システムを採用している。おそらくヨーロッパは皆同じようなシステムらしい。

人口50万人の港湾都市で運河と教会とボルボが印象的な街である。ボルボはスウェーデンの自動車メーカーであるが、本社はヨーテボリにある。そのため道行く車の半分くらいはボルボ車である。

ドイツ同様に緑と教会と近代的建物に構成された綺麗な街で、電信柱もないので電線は地中にある。きっと寒さや雪で地上に電線を張ることが難しいのかもしれない。

近代的な23階建てのタワービルに登る。この15階くらいのところにプールがせり出しているという奇妙な光景を見る。ビキニ姿の女の子がいるとう目撃情報に、一同真剣に見る。Oさんは双眼鏡で確認するが、プールにいるのはおっさんのようである。それにしてもなぜ双眼鏡を持ち歩いているのだろう。



この街は海に面しており運河が街の中にあるので運河から街並みや公園を見るという観光用の運河クルーズに20ユーロを出して乗る。約45分間の市内運河クルーズは50人くらい乗れるオープントップのボートでめぐる。非常に低い橋げたの下を通ったり海に出てバイキングの海賊船を見学したり面白い。

昼食を港近くのフードコートのような食堂街で食べる。日本にもよくある形式で大きな建物に海産物や肉類、野菜などの小さな店が並び、販売することはもちろんのこと各店にはカウンターや少人数座れるテーブル席があり、そこで食べることもできる。

今まで見てきたアジア圏や南ヨーロッパに比べて圧倒的に綺麗で清潔である。日本に比べてもそうである。しかし値段はやや高い感じがするが、肉も魚もうまい。野菜が少ないのが気になるが山盛りのマッシュポテトが付いてくる。

帰船しても日の入りは22時ということでもだまだ昼間である。夕食を食べ終えて9階のデッキに出るとまだ日が高く、とても眠る雰囲気ではない。居酒屋で飲んでいると22時という日の入り

の時間になる。ところがその後も夕焼けの明るさが 24 時頃まで続くのでさらに一杯飲む。

そして朝は 3 時頃から朝焼けが始まり既に 3 時は明るい。船室からは朝焼けの夜空に、月が光輝いている。普通は月明かりが海面に反射して綺麗に輝くのだが、月あかりよりもはるかに朝焼けの方が明るいので月は単独で光っているという奇妙な光景を目にする。

第三章 バルト海

■バルト海航行中

バルト海の入口、デンマーク海域航行中に風力発電の風車が 50 基くらい海上にある姿を発見する。日本でもよく見かける白い大きな 3 枚羽根の風車が海上に設置されている。そしてそれらは碁盤の目のように整然と並んでいて同じようなスピードで回転している。この海上は風が常に吹いているのでそこに目をつけたのだろう、その光景に圧倒され驚く。

事前にテレビなどでは知っていたが北欧は自然エネルギーやエコに対しての取り組みが進んでいる。隣で見ていた男性がぼつんと言うのが聞こえる「奴らは本気なのだ！」。

5 月もそろそろ終わる頃で、昨日の息子との定期連絡では、日本はそろそろ梅雨入りしそうとのことである。こちらはむしろ寒くてヒートテックが役に立っている。

居酒屋から 23 時頃帰ってきて、日が沈んだ後も延々と明るい夜を船室の窓越しに楽しみながら酒を飲んでいたら起きるのが遅くなってしまふ。日課のウォーキングをさぼってしまう。

寝坊した理由はもう一つ、時差調整が発生したためである。現在はバルト海を東に航行中なので昨夜寝る前に時間を 1 時間進めた。この船は基本的には西回りで地球一周しているが、このバルト海は大西洋から東にあるので東へ向けて航路をとる。従ってこの区間だけは時差調整は一日を 23 時間にする。これから寄港予定のロシアのサンクトペテルブルグはだいぶ東にある。

英会話の教室に入っているのは全体で 100 人ほどになる。本日はそのメンバー全員参加のイベントで Language Olympic なるものがある。普段の英会話教室は 6 人くらいの固定メンバーで行っており、他の教室のメンバーとはあまり交流がないが、今回は混ぜこぜにして 10 人くらいのチームが 10 チームで英語によるチーム対抗にゲームで競い合うものである。

最初は白けていた感があるものの、徐々に盛り上がりを見せる。最後はハイタッチや応援合戦などで大盛り上がりになる。もちろん英語で全て行われるのも特徴的である。

とても町内会のイベントではこんなにはならないが、やはり旅先で船の上という環境と外国人先生がうまくリードしていくことがその要因であろう。外国人のテンションやエンターテインメントは日本人とは一味も二味も違う。

サウナの知り合いで、普段は大勢に批判的でわが道を行くような人もはしゃぎまくっている。彼にもこんな一面があるのかと驚くが、だから人間とは面白い。

寄港地で購入してきた食料を持ち込んで昼食は 8 階デッキで宴会になる。ニシンのオイル漬け、

辛子マヨネーズベースのソースにニシンを漬け込んだもの、生ハムなどを持ち寄って食べる居酒屋仲間の昼の部の集まりである。

食料の提供人物のおかんはKさんの知り合い、みんなにふるまって喜んでもらえるのが楽しいということでもみんなのために食料を調達してくれる。現地の美味しい肉類・魚貝類などをわざわざ買って来てもらうので、こんなありがたい話はない。

私たちがそんなことをしているのを見てか、寄港の翌日にはいろんな場所で同じような催しが開かれるようである。船旅ならではのこともかもしれない。

5月30日の船内新聞によると日の出は4時50分、日の入りは22時23分、昼間の時間は18時間にもなる。日が沈んでも夕焼けが長く続くので明るい時間はもっと長い。夏至に近い頃なので北極圏に入れば一日中太陽が沈まない白夜が体験できる。

その反対に冬至の頃ならば太陽が出ない日を極夜と呼ぶという。この言葉を私は知らなかった。

無言の帰国者が出たとの噂話を聞く。60代男性で二人部屋の乗客で朝起きて同室の人が声をかけても起きないので、触ってみると体が冷たくなっていたというもっともらしい話である。

それからクルーも先日一人亡くなったという。クルーには60才を超えるような人はいないので比較的若い人と思うが、人生何があるか分からない。

■初夏のサンクトペテルブルグは快適

ロシアのサンクトペテルブルグに寄港する。昔はレニングラードと呼ばれていた都市だ。ここは自由行動ができないという。オプションツアーに乗らないと下船もさせないというロシア当局からのお達しらしい。

サンクトペテルブルグは帝政ロシアのピョートル大帝が作った街でロシア第二の都市。今日は晴天で初夏の今は非常に過ごしやすく快適で、ロシア人たちは公園で日光浴をしている。

ところが冬は寒くて今年は -38°C にもなったという。そうかと思えば今年の夏は暑くて最高気温 38°C を記録したとのことで、埼玉や群馬も寒くて暑いはその比ではない。想像するに真冬は極夜に近いので太陽がほとんど照らなくなり、真夏は朝早くから夜遅くまで太陽が照っているから気温に差が大きいのだろう。少なくとも私はとても住みたいとは思えない。

ピョートル大帝が夏に過ごしていたという夏の宮殿を見学する。この宮殿は噴水がポイントで緑豊かな庭には噴水が150以上ある。近くの高台に自然水が湧くところがありそこから水を引いてきているという。昔は電気もないのでポンプではなく自然の力で水を出していた。究極のエコに感激する。

そして宮殿の建物というのは豪華絢爛で金をふんだんに使用しており光り輝いている。金ではないと思うが金色に輝いている。この金色の多用というのはロシア建築の特徴であろう。

宮殿は海に面しており噴水の水がバルト海フィンランド湾にそそぎこむ。ともかく宮殿も豪華で、敷地も広くて帝政ロシアのすごさを改めて痛感する。

この地から遥か彼方の極東の小国へ向けて出て行ったバルチック艦隊は日本海開戦で負けてしまう。当時は日本が勝利するとはとても想像できなかったに違いない。バルト海は英語読みなの

で、現地語ではバルチックである。

サントペテルブルグ市内の見学の見学に行く。街はドイツほどではないが比較的広くてきれいである。教会をいくつか見て回るがどれも大きくて金色の装飾が特徴的で、建築様式としてはインドやイスラムの影響があるかと思う。

血の上の救世主教会というところで面白いものを見る。教会の高い天井の上にある天井画に若いキリストの顔が描かれている。キリストの絵は通常は彼が亡くなる直前の 33 才頃の顔で描かれているが、この絵は 13 才の頃の顔だという。数十 m も頭上にある天井から少年のキリストが下にいる我々を見ているのは何とも不思議である。そういえば他の偉人にしても少年の顔というのはなかなか見かけない。



もう一つの発見で、ロシア正教の教会には椅子やベンチがない。今まで各地で見てきた教会では椅子はつきものであったが、ロシア正教では椅子は置かないということで人々は立ってお祈りをするという。

ロシアの土産物といえばマトリョーシカ人形と相場が決まっている。実は日本のこけしをまねて作られたそうである。そのマトリョーシカ人形の中にウォッカが入ったものをお土産に買う。

ヨーロッパの都市は侵略をしたりされたり歴史があり、ここサントペテルブルグもスウェーデンとの 20 年戦争や最近では第二次世界大戦ではドイツに 900 日も包囲され、爆撃の傷跡が残っている。教会の柱にもそれらの傷跡がある。

船が出航しフィンランド湾に出る前にはいくつもの要塞が存在する。日本の長崎にある軍艦島のような光景を目にする。もっとも長崎の軍艦島は石炭の採掘の島であり、形が軍艦に似ているというだけであるが、こちらは機能が軍艦になっている。

■危ない老人

事情通というのはどこでもいるもので、その事情通の人たちから居酒屋やサウナでいろんな情報を得る。いつの間にか私も事情通になっているかもしれない。

サントペテルブルグのオプションツアーでかなり年配のおじいさんが人混みでスリにあっ

たという。スリの手口は、複数人でその老人をターゲットにして近づいてきて、前から話しかける人間、肩からかけているバッグのひもをハサミで切る人間、バッグをとって逃走する人間など分業されている。取られたところを同じツアーの人が気付いて追っかけたが時すでに遅く逃走されたという。

しかしながら幸いにもパスポートは近くに捨てられていて戻ってきて、現金とクレジットカードは取られたという。今のパスポートはICチップが埋め込まれて偽造などできないので価値がなく、かえって足がつくので捨てるらしい。

スタッフが探しているので、その間は添乗員臨時代行を事情通の友人がつとめたりして大変であったという。しかし盗まれた本人はお礼の一つも言わないということで友人は憤慨している。どうも認知症もあるようで、改めていろんな人が乗船していることを実感する。

似たような話をヨーテボリ寄港の後に食事と同席したおばさんから聞いたことを思い出した。

やはりかなり年配の男性が街の大きなショッピングセンターをふらついており、たまたま自由行動をしていたそのおばさんたちが気付いて声をかけた。聞き出した話ではオプションツアーのバスに乗っていたがどうも迷子になったらしい。

おばさんたちが船に電話をかけると船ではそんな事実は承知していないという。しかし放っておけないので船に連れ帰って事なきを得た話である。そのオプションツアーは午前中に帰船するものなのにおばさんたちが見つけたのは午後3時ということで3時間以上も一人でさまよっていたことになる。

なぜオプションツアーの主催側が把握していないというのが不思議であるが、考えられる理由でオプションツアーは途中で離脱することができるので途中離脱した可能性が高い。

途中離脱のためには個人責任で帰船する旨を合意するサインをすることになっており、ヨーテボリは港と市街地が離れているので多くの人々が離脱したのでその人も間違えてサインしたのではないかと想像できる。日本人の特性でみんながやるなら自分もやるというのがある。それにしても船側の対応に、そのおばさんたちは憤慨していた。

これらの2つの話の登場人物のおじいさんが同一人物の可能性が高い。

スリや迷子には気をつけると注意喚起はもちろんであるが、半ば認知症らしき人への対応が問題である。このような人のオプションツアー参加にはスタッフを余分に付けて特別料金を設定してでもケアする必要がある。

そもそもそんな人が一人で船に乗って地球一周というのに無理があるような気がする。リピータが多くなってきているのがこの船の特徴である。全く初めてならば自信がないので乗船は躊躇するがリピータはなまじ経験があるので躊躇がない。若者はお金がないのでリピータになりにくい、高齢者はお金を持っている人も多く、家にいてもつまらないので船に乗る。

日本では後期高齢者でも船に乗ればマダムである。だから船は老人ホーム化していく。船内イベントには元気な中高年や若者が参加して盛り上げているが、イベントを見ているだけあるいは見ないお年寄りも多くいる。

テレビ番組でクルーズ船の特集があったのを思い出す。クルーズ船で生活するお年寄りが増えており、寄港地についても下船しない人もいる。

この船は若者たちが世界に出ることが目的で始まったが、その若者が減少して高齢者が増えており老人ホーム化している。お金を集めるためにリピータを中心に高齢者を募集するのだがそこに課題が発生している。何を指すのかを再度考える時期かもしれない。

■ムーミンの故郷

フィンランドのヘルシンキはムーミンの故郷というのを英会話教室のクラスメイトから聞いていて、そのヘルシンキに寄港する。

港と街が一体化していて港から市街地までのアクセスがとても良く、歩いて15分くらいで街の中心に出る。船旅の旅行者にはありがたい。私にとって港町と言えば地元の横浜であるが、横浜より綺麗で活気がある。

港町なので海や運河が中心だが、緑も多く、当然ながら大聖堂や教会もある。今まで訪れてきた街の中では最高に気持ちよく歩くことができる。もちろん電信柱はなくトラムの電線が道路の上に架かっているくらいですっきりしている。トラムも味わいがあって街に溶け込んでいる。人口60万人というサイズは一国の首都にしては小さいが住みやすい大きさかもしれない。

本日も晴天なので、陽の光によって緑の木々と青空のコントラストが際立っていてとても良い。人々は日光浴や買い物に街に出ているが、日本のようにアクセクした様子もなければ、南ヨーロッパのように朝から遊んでいるといういい加減さも無いように見える。

うん、相当ひいき目に見ているかも知れないが、どの町にも必ずあった落書きもなく明らかに綺麗で住みやすそうな町である。

港のそばにマーケットがあり、ハンドメイドの飾りや土産物を売っている。ミンクの帽子が気に入ったので記念にもなるので購入する。この暖かい本物のミンクの帽子が1万円弱で買えるとは有り難い。

テンペリアウキオ教会という変わった教会を訪れる。普通の大聖堂のように縦に長い塔はなく平べったいドームのようになっていてドームの周り部分が石でできている。だから石の教会とも呼ばれている。

変わっているのは建物の中で、コンサートホールのようにになっている。半円形競技場のように真ん中のステージらしきところが低くなっていて、そこから半円形に階段状に席が緩い傾斜でせりあがっている。十字架はステージの中央奥に小さく置いてある。

パイプオルガンも壁面に設置されているが、ステージ端にグランドピアノがある。私たちが訪れた時はちょうど演奏していて、その演奏を聴きながらゆったりとした時間を過ごす。

日本の小田原にある寺カフェを思い出した。鉄筋コンクリート建てのお寺の本堂の下がカフェになっていて、中に入ると通常のカフェだが外から見るカフェがあるのもわからない。

カフェはちょうど本堂の下に位置している。本堂は畳敷きで畳の上に教会のような椅子が並んでいる。本尊の左側にグランドピアノが置いてある。この本堂でもコンサートを開くことができ、そのときは仏像の前にある椅子や木魚をどかし5m四方くらいの板の間のスペースで弦楽四重奏ができるという。

■船内は恋の花盛り

恋するために人生があるということをこのサウナで知り合った人から聞く。彼は物書きで本を出版し、ブログでこの船旅を紹介もしている。ちょっとした有名人らしい。ブログは一万くらい読者がいる。船上で彼が女性にアタックする様子や気持ちなどを書き込んでいたが残念ながらふられてしまって、ふられた記事を書いたら飛躍的にアクセスが増えたという。人間とは人の不幸が好きで、特にその類の恋愛話は大好きなのである。

もう少し紹介すると彼は 70 才で奥さんとは家庭内別居状態で本当の恋がしくて船に乗ることにしたという。

今回の航海で 3 回のアタックをするが 3 敗している。最初は 2 才上の人にアタックした。彼女の OK をとり、部屋に迎え入れた。いざその直前になって彼女は主人を裏切れないので抱きしめるだけにしてほしいという。それはないでしょうということで破断になる。

それ以降 2 人にアタックしているが残念ながら失敗している。今 4 人目の女性に対していい線までいっているという。明日からオーバークランドツアーでしばらく船を離れるために本日が勝負の日という。

いつも居酒屋で飲んでいると元アイドルの K ちゃんのところに初老の女性が来て何やら頼み事のように K ちゃんを連れだす。初老といっても 60 才は軽く超えている。戻ってきた彼女に聞くと K ちゃんが恋のキューピットをやっているという。

その相手とは何と船のクルーである。外国人なのでラブレターの代筆を頼まれて書いてあげて、それがうまくいっているというからすごい。クルーとお客では本来は禁断の恋かもしれないが、恋にはスリルがつきもので、そんな境遇の方が人間は燃えるものである。規則違反ながら食事と一緒にしたという。もっと進めたいのでさらなる長文のラブレターの代筆を頼まれたというのが本日の依頼である。

クルーまで含めた恋愛が進んでいる。ピースボートならぬピンクボートである。

こんな話も聞く。社交ダンスをしている男性 A さんと女性 B さんが良い仲で、一人部屋の A さんのところへ B さんが入り浸っているという。A さんはこの船に乗った直後は別の女性 C さんと一緒に過ごしていたが、途中で切り替えたとう。そのためにふられた C さんは地球一周の途中で帰国してしまったという。これは自己都合の帰国にあたる。

ちなみに A さんは日本でも社交ダンスをやっているが、もう 3 年目なのにいつまでも初心者グループにいるという、通常は 2 年目には初心者グループを卒業するのが普通というが、どうも目的が社交ダンスでないかもしれない。

サウナでよく会う船内事情通の話では、奥さんではなく愛人と乗船してきた人の話を聞く。問題は愛人同伴の彼は、その愛人ではなくこの船に乗ってから別の女性を口説いている。

独身者は相手を見つけるために乗船している人も多い。既婚者でも一人で乗船する人は多少のアバンチュールを期待しているかもしれない。

挙句の果てには事情通から「植木さんは、どうして奥さん同伴で乗ってきたの。何が楽しいの？」などと質問される。みんながみんな同じ目的で旅をしていない。まあ、私も 40 年前に行った日本

一周旅行ではそれを旅の大きな目的の一つにしていたことを思い出す。

居酒屋友達のKさんからこんな話を聞く。Kさんは真っ直ぐな性格で人望のある人で、奥さんを日本に残しての一人での乗船である。友人の女の子から「そろそろ本命を決めた方がいいよ」と言われ、大変ショックを受けたという。気心の知れた彼女から言われたのがショックだったという。

そろそろ旅も半ばで相手を決めるなら良い時期ということであるが、そんな目的で乗っていないのに仲間からそんな風に思われているのかとがっかりしたらしい。

そのKさんの話ではハワイを過ぎると一人部屋あるいは二人部屋へ移動しませんかというキャンペーンみたいなものがあるという。船側もいろいろ考慮してくれるようだが、ビジネスチャンスには間違いない。そういえば船の売店には避妊具も置いてある。

この船では、いやこの船でなくても普通の生活でも同じかもしれないが、男と女のラブゲームは盛んである。

特に旅は解放感を与え、そして船旅には時間がたっぷりある。旅行日程の106日間のうちで約80日間は船上生活である。お酒、ダンス、音楽という促進剤があり、何よりも3度の食事を作ることを片づけること、さらに終電も気にしなくて良い。

地球一周の船旅というステージでは船内イベントや寄港地での現地ツアーなどのプログラムが進行しているが、同時に男と女の思惑が複雑に交錯するゲームも進行している。

■日本語を教える

居酒屋仲間のKちゃんがドイツ人に日本語を教えるということで一緒に教えることになる。

どういう経緯でこの船にドイツ人が乗っているのか知らないが、ともかくもヨーロッパに入ってから十何人かのヨーロッパ人がお客として乗り込んでいる。

ドイツ人だが、英語はペラペラなので英語を仲介にして日本語を教えることになる。ところが日本語を教えるという経験が私たちにはほとんどないので、これが結構大変なことを初めて知ることになる。

日本語で一番便利な言葉が何か、「すみません」、「どうも」いろいろ教える。近くを通りかかった通訳のAちゃんにも聞く。同じようなことが通訳仲間でもあったようで「微妙」という言葉が便利ということになったという。私の英語力では微妙を説明しきれないので本職のAちゃんに通訳を頼む。それにしても微妙が便利とはこれもまた微妙である。

5W1Hを教えた方が便利かもしれないので、それも教えるが、それもあまり妙案ではないことに気が付く。5W1Hは英語ベースの表現で日本語では難しいことがわかる。例えば年齢を聞く場合には英語ではHow oldであるが、日本語は「いくつ」「何才」「年齢は」「お年は」などと表現が多く整理しにくい。

これからは日本語の教え方を勉強しないといけないことを痛感する。

■水と緑と歴史と自転車の街

6月3日デンマークのコペンハーゲンに寄港する。歩いて自由行動で街の散策をする。

港から程なく歩くと人魚姫の像の偽物がある。偽物という悪意で真似たようであるが、そんな感じはせず人魚姫を大きくしてグラマーにしたものでこれはこれでモニュメントとしては結構いける。



問題の人魚姫は世界三大がっかりの一つという。その事前情報でがっかりする覚悟をしていたが、そんなにがっかりしなかった。先ほどの偽物に比べて半分以下の大きさで、ほぼ人間と等身大である。港のはずれの地味なところにポツンとある。この像がどうしてそんなに有名になったかはわからないが、世界三大がっかりにってしまったのは、有名にした側の責任のような気がする。

ちなみにあと二つの世界三大がっかりとはシンガポールのマーライオン、ベルギーの小便小僧である。

すぐ近くに函館の五稜郭のような城がある。正確には五稜郭が真似をしたのであるが、五稜郭よりも立派で大きい。堀の中は自然の堤防で守られた広い広場に赤壁の兵舎のような3階建て建物が立ち並ぶ。庭は石畳と芝生が敷き詰められている。芝生に腰を下ろしてそよ風にあたり、ゆっくりするがこんなに気持ちの良いことはない。

コペンハーゲンといえば陶器で有名なロイヤルコペンハーゲンである。本店の前のレストランで昼食をいただく。人通りも多く、けれども一定のモラルが保たれた街で成熟しているが活気もある。

そしてもう一つ有名なチボリー公園に行く。日比谷公園のようなところを想像していたが遊園地である。入場料も高く時間もないのでゲートで記念撮影だけして後にする。

その代わりにローゼンボー公園がイメージしていたとおりの公園である。日比谷公園より綺麗で大きい。公園内に池があり池の真ん中に離宮がある。正確には池というよりも離宮の周りに堀がめぐらしてあるという感じである。古くて大きな離宮は自動小銃をもった衛兵が警備している。

誰が住んでいるのだろう。

道路には街灯があるが、いわゆる柱がない。建物と建物の間にワイヤーロープを張って、そのワイヤーロープに電灯がぶら下がっている。電線はワイヤーロープに直角に交差するように通されていてトラムの電線のように見える。柱がないので通行に邪魔にならないのがメリットかもしれない。

街の中は自転車道路が整備されており、車道と歩道の間は自転車道になっている。日本のように歩道の一部に申し訳程度に用意されたのではなく、本格的に市民権が確立されている。ここを自転車が早いスピードで何台も通過していく。

街のいたるところには無人のレンタルサイクルがあり、コインを入れて借りることができる。そのため自転車が非常に多く、人々の足に使われている。エコと健康を両立している。自転車の利用が多いのはあまり坂が少ないせいかもしれない。

それから様々なタイプの自転車がある。前輪に荷台を付けたタイプが目につく。前のカゴを非常に大きくして荷物や人を乗せることができる。子供を乗せるだけでなく老人を乗せた自転車もある。

ここコペンハーゲンも運河の街である。港があるので海が近く、運河に囲まれている。ただ潮の香りはあまりしない。水と緑と歴史と自転車の街、コペンハーゲンは実に素晴らしい。

第四章 北大西洋

■忙しい一日

コペンハーゲンを出航すると北海、そして北大西洋に出る。アイスランドを経由してカナダを目指すことになる。

本日は忙しい日になりそう、朝は英会話教室のみんなと先生を囲んで朝食をとる。

一昨日の英会話教室で、自分たちのクラスへの提案というテーマで一分間スピーチを行い、朝食をみんなで取ろうという提案があり、早速本日実施することにしたのである。

朝から英会話というのも結構大変であるが、これはこれで面白いとポジティブにとらえないと人間成長しない。昨日何をしたから始まり、今日何をするという他愛のない会話が弾む。1時間くらいで朝食は終わるが、朝から疲れる日になる。

女優でタレントの東ちづるさんがヘルシンキから乗船してきたので、本日は初めての講演を聞きに行く。聞きに行くというよりも見に行くというのが正直な気持ちである。55才という年齢よりも若く見える。やはりメンテナンスが良いのだろう、さすがに女優である。

そんな気持ちで行ったのだが、講演内容で驚かされる。タレント、女優という芸能界の話ではなく、「Get in touch」という彼女が立ち上げ代表を務める団体の話である。「まぜこぜの社会」を目指すというもので、社会的少数派の弱者も共存できる社会をつくらうというものである。

少数派とは身障者、性同一性症候群、引きこもりなどであるが、しっかりと取り組んでいる姿がとても印象的である。

顔を見に来たつもりが、内容に感動するとは思ってもみなかった展開だ。最近乗船するゲスト講師には少々期待外れが多く、がっかりしなければと思っていたがうれしい誤算でもある。

昼過ぎにまた英会話教室がある。ところが本日私は日本文化の継承というイベントで落語をしないといけない。早退することを伝えたいがその英語が出てこない。辞書をひくと **leave early** と出てくる。言われてみればそうか、どちらも知っている単語を並べているだけなのにそれが出てこないのは、やはり頭が錆ついている。

ヨーロッパに入り外国人が乗ってきているので日本文化の紹介をするというイベントがあり、落語の説明と落語を演じる。持ち時間は 10 分間で、私が落語と出会ったことや大学落研のこと、そして落語の説明それも演じる側からの説明を行い、最後に落語を 3 分間演じる。

初めての経験は高座で通訳が入って話すことである。事前に話す内容を知らせてあるので通訳内容には問題はないが、自分が話した後に通訳が英語で話すのに時間があくので間の取り方に少し戸惑う。

内容が落語の落ちについて説明するところはどんな訳になるのか興味深い。昨夜の居酒屋の席で通訳の女の子 R ちゃんがいたので落語の落ちの訳を聞いてみると、よくわからないとのことで英会話の先生、つまり外国人に聞いた結果、**punch line** という答えが返ってきた。うん、わからないでもない。

乗客参加型の船内イベントで漫才の M-1 グランプリが開催される。私は審査員の要請がきたので参加する。

一番前の特等席に東ちづるさんと一緒に観戦するという待遇が良い。さらに審査の票は一般が 1 票のところ 10 票あるのでこれも面白い。紅白歌合戦のように適当なコメントを言わないといけないが、これも初体験で面白い。

さて問題の漫才の内容であるが、これが結構面白い。素人とは思えないようなコンビもあり会場は爆笑の渦である。

落語、それも古典落語の場合ネタが決まっているので演技力が勝負であるが、漫才はどちらかというとネタが勝負である。この短期間でよく考えたなという。

6 組の出演者のうち若者が 5 組という構成で、やはり若者の感性は素晴らしい。

夜は居酒屋仲間の Y さんの誕生パーティが開催される。通訳の女の子など含めて総勢 16 人が集まる。

通常はレストランで行うが、人数が 12 人までと制限されるので本人が自腹を切って居酒屋で開催する。久しぶりに寿司をいただく。若い女の子が 8 人、おじさんが 8 人の北欧でのパーティは彼の 64 回の誕生日の中で最高のものになったと思う。

夫婦でプレゼントを渡す。妻からは手編みの物入れ、ここ 2 日くらい編み物をしていたのはこのためだったようだ。私から渡したプレゼントは絵葉書に切手を貼ったもので、絵葉書はヨーロ

ッパで撮影されこの船で作られたもので、自分で住所を書いて船内のポストに投函する旨を付け加えた。

ここで船のポストに投函すると次の寄港地アイスランドのスタンプが押されて自宅に届くことになる。

■ノルウェーは素晴らしい

ノルウェーは北海油田のために裕福な黒字国である。人口 500 万人で国土は日本と同じくらいなので人口密度は日本の 1/20 である。そのノルウェー第二の都市ベルゲンに寄港する。

ここノルウェーではフィヨルド遊覧とノルウェー鉄道の最高傑作というフロム鉄道に乗るために船のオプションツアーを予約している。個人手配でも行けそうであったがフィヨルドと鉄道を効率よく乗るためにツアーを利用する。

ベルゲンからボスという都市を経由してバスでグドバンゲンという街に到着する。バスの車窓からの見る景色も素晴らしい。街並みがきれいで大地は緑で、空は青である。ベルゲンは実に雨の多い都市で昨年の実績で降雨日は 245 日だという。今日は本当に幸運だとガイドはしきりに言っている。

そういえば今までの地球半周分のクルーズで雨に降られた記憶がない。一度どこかで少しパラパラ来たことがあったかもしれないが傘をさすほどではなかった。特に北欧に来てからは抜けるような青空でとても暖かい。地元の人たちはTシャツ半ズボンで、昼間は裸で日光浴をしている。

街がきれいというのにはもう一つ理由がある。ノルウェーの街には商店や宣伝の看板がない。ガイドさんの話では法律で看板を禁止しているという。

面白い話がもう一つ、この国の国教はプロテスタントで、運営は国が行っている。つまり牧師は国家公務員ということになる。ついでに言うとプロテスタントは牧師、カトリックは神父と呼んでいる。



グドバンゲンからネーロイフィヨルドとソグネフィヨルドをぬけてフロムという小さな町まで約 2 時間のフィヨルドのクルーズである。クルーズ船には 200 人くらい乗っている。なぜならば私たちの船からバス 5 台分の人に乗っており、その他の観光客は 20~30 人程度だからである。

抜けるような青空ときれいな海、そそり立つ陸地が見える。フィヨルドなので陸地というより

は山である。山の上の方は雪が残っており、このあたりでこの時期に雪が残るのは標高 800m くらいから上とのことである。

フロムから登山電車に乗りミルダルに向かう。これがノルウェーの誇るフロム鉄道で登山鉄道の最高傑作といわれている。船着き場から電車の駅はすぐ隣で、海拔は 2m である。そこから終点のミルダルまでは 20km で標高は 866m である。世界でフロム鉄道ほど勾配のきつい鉄道はないという。

景色はとにかく絶景で、緑の山々の上の方は雪が残っている。その合間をところどころ滝が落ちているが、滝の水量は多い。日本のような三角の山では水量が多くはならないが、ここは山の上がテーブルのようになっており、テーブルの上には湖がありそこを水源にして滝に水が供給されているので水量が豊富である。

それほど水量と落差があるので、ノルウェーの国内電力は全て水力発電でまかなっている。完全に自然エネルギーだけというのは全く想像をできなかったが、ここに来てこの景色を見ていると納得する。

フロム鉄道最後の見せ場はショッスフォッセン駅の近くの巨大な滝である。ここで 5 分間の停車があり滝見物をする。巨大というのは高さもさることながら水量で、水しぶきが列車までかかる。乗客はほぼ全員が降りて記念撮影に真剣である。5 分間の後半には音楽が鳴り、最後の頃に妖精が現れて華麗に踊る。

言い伝えによるとここで妖精を見ることができた人は幸せになるという。鉄道会社の粋な演出である。列車に戻った人達は、口々に妖精見た？と言いつつ。さすが最高傑作の登山鉄道である。

ミルダルでフロム鉄道からベルゲン鉄道に乗り換え、ボスに戻る。ボスのカフェで生ビールを一杯飲んだが、1300 円もとられる。ガイドから物価は高く日本の 2 倍以上とは聞いていたが実感する。



ベルゲンに戻り、街を散策する。港町を一望できる標高 320m のフロイエン山にケーブルカーで登る。早速ケーブルカーの 6 分間の旅に出る。往復で約 1200 円とその金額を払う価値は十分にある。

ケーブルカーの終点には展望台とレストランがある。市内が一望でき、私たちの乗っている船も見える。さらにそれより大きな船が 2 隻停泊している。街の真ん中に港と池があり、池には噴

水が出ているのがわかる。海と山と緑と綺麗な家並みが入った街である。

ブリッケン地区という世界遺産の木造建築の倉庫街に立ち寄る。ハンザ同盟の事務所に使われていたというもので、現在も喫茶店や土産物屋として一部が使われている。驚くのは世界遺産なのに入場管理がされておらず、勝手気ままに見て回れる。もちろん入場料もない。本当におおらか国である。

似たような施設の日本の富岡製糸場とは雲泥の差である。日本人の暮らしや日本の仕組みにまたまた疑問を持つ。

付け足すことが一つ、太陽がでて日光浴に適しているという日は、会社によっては特別休業にして社員に日光浴を勧めるという。ちょうど本日はそんな日で、快晴に近い青空で街の人々はみんな日光浴をしている。

■不満噴出

本日はソグネフィヨルドとネーロイフィヨルドの遊覧をこのオーシャンドリーム号で行う。昨日のオプションツアーで遊覧船に乗ったのと同じコースである。事前にこのことを知っていたならば、オプションツアーの取り方を変えていた。同様な不満をいろいろなところで聞く。

朝食のテーブルでは昨日のそのツアーの話で盛り上がる。

フロム鉄道に乗り込むにあたってバス 5 台のうちに 1 台分の席の割り当てがうまくいかなかった。そのために座れずに過ごしたというクレームである。全体の席数は足りていたが、1 台のバスの乗客だけがバラバラになったためである。スタッフやガイド間の連携ミスが原因である。

スタッフは日帰りオプションツアーの添乗をしているが、添乗員の資格を持っているわけではなく、この船でのクルーズ経験が少しあるだけで要はアマチュアである。

3 カ月前にイタリア旅行に行ったときの添乗員が素晴らしかったので、比べるのもかわいそうであるが、添乗員とは専門スキルをもったプロ意識の強い仕事である。だから添乗員を指定してツアーを選ぶお客も増えている。

アマチュア添乗員に任せるならば、費用もそれなりに抑えないといけないが、そうでもない。地球一周の乗船料金を抑えるために、穴埋めとしてオプションツアーの価格設定になっているようである。

そんな話から始まって、乗客のモラルの話へとなる。安い船だから、何でもよいという風潮がありレストランでの夕食に草履、短パンやパジャマで来るお客がいる。帽子をかぶったままで、肘をつきながら食るとか、箸の上げ下げまで話題に及ぶ。

話の主旨は理解し賛同するものの、悪いことにその時はちょうど私は雪駄と妻はサンダルである。口ではそうだと言いながらも足を隠しながらのひと時になる。

同様な話を他にも聞くことが多い。常識のない一部のお年寄りに注意もできない。昔はそうでもなかったとは思いたい、家でくつろいでいるのと同じことをしている。これがこの船の老人ホーム現象の一つになっている。

■余裕のフィヨルド遊覧

それにしてもフィヨルドは絶景である。昨日も見たが、考え方を変えれば2日間にわたりフィヨルドの景観を楽しむことができ、良かったかもしれない。1日ではあつという間かもしれないが2回目は余裕を持って楽しむことができる。しかも3万トンを超えるこの外洋クルーズ船が外洋から200kmも内陸に入り込み、行き止まりのフロムとクドバンゲンではUターンをするという体験ができるとは思わなかった。それは水深が1400mで幅が5kmということだから可能なのである。

今日は大きな船内企画もなく、乗客はのんびりとフィヨルドの雄大な姿を見ている。

寒さを予測したのかデッキのバーでは熱燗や甘酒の販売している。しかし今日も天気が良く、本来ならば寒いはずのデッキも日向にいれば半袖でもいられる。それでも熱燗などは早々と完売をしている。

お酒を片手にフィヨルドを体験するそんな一日もあっても良い。

フィヨルドの溪谷にモヤがたちこめている。幻想的な風景を見ることができたと感激する。しかしこのモヤの正体がこの船が煙突から出している煙であると判明する。煙が溪谷の中に帯状に漂っているのは、さすがにちょっといただけない。平和とか環境とかを旗印にしている船ならば尚更である。



■夫婦

夜はGちゃんの誕生パーティに参加する。彼女も一緒に仲むつまじい。これが先日まで振られたとか、別れたとか言っていた二人とは思えない。男女の仲とは不可思議である。そして今夜は誕生会というより婚約披露パーティのようになっている。

この誕生会にも若い女性とおじさんが多く参加している。なぜか誕生日を祝ってもらう本人が料理や酒をふるまうスタイルになっている。ごちそうさま。

いっこうに日が暮れないので夜10時になっても明るい。本日の日の出は4時、日の入りは23時なので、夜が更けていくという感じが全くしない。

20人くらいで延々と宴会が続く、気が付いたら夫婦で乗船しているのは私たちだけである。どうも一人で乗船した人はそういう人たちで群れをつくり、そこにあまり夫婦連れは参加しない。夫婦連れは夫婦で行動するので夫婦連れの仲間ができる傾向にある。夫婦でべったりというのも

考えものである。

Gちゃんは私たち夫婦を理想の夫婦と持ち上げて紹介してくれる。ありがたい言葉である。では、その私たち夫婦が理想としていた夫婦は誰だったのだろうか。そんなことを考えてしまう。

■旅は折り返しに

6月7日の船内新聞には日の出は3時19分、日の入りはなんと23時22分と書いてある。そして日の入り後も夕焼けが延々と続き、真夜中も何となく明るい。

船はアイスランドに向かって北西に航行している。緯度がさらに上がり、イギリスのグリニッジを超えているので東経から西経へと経度も変わっている。日本との時差は現在8時間であるがサマータイムの分があるので9時間になる。経度からみれば日本の反対側まで届いていない。

それにしても北欧は素晴らしかった。スウェーデン、ロシア、フィンランド、デンマーク、ノルウェーと寄港してきたが、ロシアは別として4カ国は全体的には似ている。感覚的には寄港するたびに徐々に感動が更新していく。

私が住みたい国としては最後のノルウェーを勧める。理由はこの旅行記にも書いたが、経済も人々の暮らしも裕福で、街がきれい。メキシコ湾流の影響を一番受けやすい大西洋沿いなので比較的温暖である。ただ物価が高いので私の年金では移住しても暮らしていけない。

船内でフラダンス、和太鼓、詩吟などの自主企画があり、本日はそれら自主企画の中間発表会なるものがある。106日の長い船旅も折り返して点を過ぎたということになる。

私も興味本位でフラダンスに顔を出したことがある。ひざを曲げて中腰で踊ることが要求されて、使用したことのない筋肉を使うために相当疲れた。翌日のウォーキングで階段を上り下りするたびに筋肉痛を感じて、それ以来遠慮している。

同じ先生が教えているタヒチアンダンスを初めて見る。ハワイアンよりもリズムが躍動的でこちらの方が私には合っている気がする。とはいってもこれから練習に行く気はない。中間発表会ではあるが1カ月半くらいの初心者集団の割に出来栄は上々と思える。

居酒屋仲間のOさんも女性ばかりの中に混じって、男一人で頑張っている。1カ月半とはいえ続けることに意義がある

■若い女の子とディナーとお酒

今日はディナーの日で、おしゃれをして4階のレストランに来て下さいという。

同席した若い女の子3人に話を聞いた。みんな20代で職業は学校の教員、看護婦、ガソリンスタンド勤務という。正確にいうとガソリンスタンド以外は、仕事を辞めての参加という。やはり3カ月半も休みが取れないのは当たり前かもしれない。女の子だからなのか、その思い切りの良さは男にはないような気がする。

そのあとガソリンスタンド勤務の彼女と居酒屋でOさんも一緒に3人で飲むことになる。

この船に乗るきっかけはガソリンスタンドにポスターを貼らせてほしいという若者がやってきてそのポスターを見てから興味を持ったという。そして地球一周に行きたいという想いを店長に話す店長が応援するから行ってこいということになり、仕事をしながらポスター貼りをしてきた

という。この船はポスターを貼ると乗船料が優遇される制度があり、何千枚か貼ると無料になる。

彼女の話では、ポスターを貼ったりお金を貯めたりという乗船前には確かな目的があって、一生懸命生きてきたが、いざ出航して旅に出たら心が空っぽになってしまい目的を失って何もしていないという。

おじさん二人が酒を飲みながら、10分20分ともっともらしいアドバイスをしていく。何を言ったか覚えていないが彼女は少し涙くみながら何かを感じたらしい。そんな若い女の子とまじめな話をすることや悩みを聞くということは日常生活ではありえない。この船の魅力の一つかもしれない。

若者たちはみんな面白いニックネームを付けている。ガソリンスタンド勤務でシェル、好きな色が青だから青ちゃんとかである。

他にも早々に知り合った子でメンチーという女の子は明太子とチーズが好きだから、ポジという男の子はポジティブになりたくて付けたという。私も乗船前にあれこれニックネームを考えていたが、結局よさそうなものが見つからず断念した経緯があり、自分の発想の貧困さを痛感している。

■驚きの人間模様

この船は一人で参加する乗客のために相部屋での募集がある。一部屋を2人または4人で使用するので乗船費用は安くなる。同室相手は希望が無ければ船側が決めるが、その組み合わせによっていろいろなドラマを生むことになる。

知り合いのおばさんが体調を壊して途中下船をするという。もともと持病があって悪化したとか、病気が船内で治らないから途中下船と思っていたら、実情は違うようだ。

彼女は4人部屋で他人3人と船内生活をしている。部屋の中の特に一人と人間関係がうまくいかず、簡単に言えばいじめにあっていたようで、精神的に追い詰められたために食べられなくなって体調を崩したという。

そういう例をいろいろなところで聞く。女同士が多いかと思ったら、男同士でもとつきみあいのケンカをしているのも目撃されている。

モラルの低下が著しい。帽子をかぶってレストランで食事するくらいはかわいいもので、廊下をパンツで歩いている。ビュッフェスタイルのレストランで一度自分の皿に取ったものを戻すとか。それもいい年をした人に多い。リピータが増えて高齢化して老人ホーム状態に陥っているのも一つの原因であろうが、老人ホームでは施設の介護士が面倒を見てくれる。この船にはその役をする人は極めて少ない。

意見が合わなくて部屋や船を出ていく人がいれば、別の例もある。

寄港地で奇妙な恰好をして歩いている年配の男女がいる。ヘルメットをかぶり、派手な衣装を身に着けて、鯉のぼりをポールに掲げて歩いている。男女ともに似たような恰好をしている。

夫婦でないので最初は別々の部屋だったが、意気投合して同室にしてもらったという噂である。

■面白いトークショー

東ちづるさんの講演という「生きづらさだよ、全員集合」というトークイベントに行く。

面白い形のトークショーで、悩みを抱える3人の若者がステージにあがり一人5分間悩みを告白して会場の聴衆に聞いてもらう。その後に聴衆の側でその内容について座席の隣近所の何人かで悩みに対してのアドバイスなどを5分間くらい話し合う。そして司会者の東ちづるさんがリードして、会場の何人かの意見を聞いて、さらにコメンテータの2名からも意見を聞く。少々強引であるが最後に東ちづるさんがまとめていくというスタイルである。

それを悩める若者一人ずつ3人分繰り返す。そのスタイルと内容が面白い聴衆参加型の討論会のようなものである。

最初の若者は、家庭内の悩みで兄と両親が不仲という。いろいろは意見が出てきたが、自分も同じ経験者であるという人も出てくる。

そして次の若者はLGBTのGであるというカミングアウトである。LGBTとはレズ、ゲイ、バイセクシャル、トランスジェンダーの略で性別での少数派になる。

私も勉強不足でこの船に乗って初めてこの言葉を聞く。何でも人口の3%程度の確率で存在するようで、東ちづるさんは7%とも言っている。

彼をよく知る若者から、そのカミングアウトに対しての応援する発言もでて声を詰まらせる場面もあり、大きな拍手にわく。

最後の若者は自分の殻から出られないという悩みである。何に悩んでいるのかがわからないのが悩みの根本にあると私は感じる。腹を割って話せる友人がいないということかもしれない。

第五章 北極圏を感じる

■アイスランドは温泉天国

6月9日アイスランドの首都レイキャビックに寄港する。レイキャビックは北緯64度8分で北極圏の66度33分まで近い、世界最北の地にある首都という。アイスランドの人口は約35万人で旭川と同じくらい。面積は北海道よりちょっと大きい程度で、北海道の人口が550万人なので人口密度は相当に低い。レイキャビックに全人口の半分くらいが集まっている。

それはそうだろうと地図をみると納得する。北大西洋の北のはずれでグリーンランドのとなりの極寒の島である。

乗客の誰に聞いても今回の船旅で最も期待している寄港地の一つである。私が期待するのは温泉で、世界最大の露天風呂ブルーラグーンに入るのがこの旅の大きな目的でもある。

アイスランドは地震と火山の島で、その意味では日本に似ている。日本列島は太平洋プレートとユーラシアプレートが入り込み、その力で地震が発生することはよく聞く。プレートが入り込むということはどこかからプレートが湧き出るところがある訳で、日本のほぼ反対側のここアイ

スランドでプレートが湧き出ている。だからアイスランドは年間で数 cm 国土が膨張している。

地震があり、火山があり、温泉もある。ただブルーラグーンという温泉施設は天然温泉ではなく、地熱発電所の余った熱を利用して温泉にしている。

目的のブルーラグーンは火山岩の平原に中にある。平原といっても草ではなく苔である。黄緑色の苔が火山岩の上にへばりついて、原野のような光景が延々と続いている。

バスの車窓からゴルフ場を発見する。イギリスの有名なリンクスのようなゴルフ場で、日本のゴルフ場とは全くイメージが違う。火山岩と苔の平原にティーランドとフェアウェイとグリーンだけがあり、とても戦略性が高い。一回やってみたいものである。

息子からのメールによるとアイスランドは寒冷で植生が極めて育ちにくい環境であることを知らず開拓民が大陸本土と同じ感覚で木を切って暖をとった結果、国土のほとんどの原生林が失われて最悪の環境破壊になったという、そのために国の環境対策に対する意識が極めて高いという。

確かに原生林などというものは全く見るできない。唯一の林というのをバスの中から地元ガイドが指さしてくれたが、ほんの 20 本か 30 本の木が生えている程度である。

この地元のガイドは大学生のアルバイトで、日本語を大学で学んでおり、日本の関西外語大に留学経験がある。時々関西弁を使い奇妙な片言の日本語がやけに面白い。ガイドとしての技量は疑問ではあるが、バスの中は笑いが止まらない。

歌うことが好きというので乗客から歌のリクエストがある。一曲歌ってもらうが、非常にうまい。こんな最北の外国で、地元の人地元の歌を生で聞けることにも感動する。まる 1 日間のガイドで何を言ったかはよく覚えていないが、この歌が一番良かったというのが多くの乗客の感想である。

バス 1 時間ほどでブルーラグーンに到着する。泉質はシリカが主成分のしょっぱい温泉で色は白濁していてやや青白い。日本のお風呂ではなく巨大な天然プールになっており男女混浴で水着を着て入る。

温度は平均的には 38℃か 39℃で、天然プールのような湯船はとても広いので場所によっては 41℃くらいある。自称温泉評価委員会、通称「おひょい」のメンバーを自負する私は、温泉の温度は肌でわかる。

熱湯の吹き出し口がいくつかあり、その近辺では比較的熱い。熱湯といっても 41℃である。深さも様々で大体は 1.2m であるが、深いところは私も少しやっとな立てるくらいである。欧米人の体格からすると問題ないが、日本人の小柄な人にはちょっと辛いかもしれない。

ビキニ姿の若い女の子がなかなか良い。昔の女の子、太古の女の子も多いのも混浴のよいところである。我々のバスが着いたので日本人が多いが、欧米人も多く入浴しており彼女たちのボリュームにもびっくりである。

施設の管理はしっかりとしていて、至る所に監視員が配置されている。入浴前にはシャワーを浴びるという行為に対しても監視員の指導があつてみな浴びている。日本の温泉ではかけ湯をすることが常識となっているが、最近はその常識を守らない日本人も多い。



湯船の横、いやプールサイドと呼んだ方がいいかもしれないが、湯船横にはドライサウナやsteamサウナも完備している。さすがに北欧、でもサウナ発祥の地はフィンランドである。

水着で入れるバーもありビールも飲むことができる。カップを持ち込めば生ビールを湯につかりながら飲め、何人かの欧米人が飲んでいるのを見かける。よほど飲もうかと思いつつも残念ながらそこまではしなかった。

泥パックなるものが女性に人気で、多くの女性たちが泥パックをしている。この温泉の成分のシリカのパックで湯船プールサイドにプールに入ったままで泥をもらうことができる。この泥パックは肌がカサカサになるので要注意と聞いていたので、私は左腕にのみ塗ってみる。

■レイキャビック観光

ブルーラグーンを後にしてアウルバイル野外民族博物館という昔のアイスランド人の家や生活を再現したものがあり、ここに立ち寄る。

小さな教会、靴職人の家などが緑の牧場に点在する。牧場には羊が放牧されている。昔の服を着たアイスランド人もおり、気軽にカメラに入ってくれる。日本でも観光地で、着物を着た侍や町人の姿をしたボランティアのような人を見かけるが、同じような感じである。

ペルトランと呼ばれる丘の上にある巨大なドームに立ち寄る。4階の展望台に登ると、レイキャビック市内を360度見渡すことができる。

北と西が海に囲まれて、市街地や教会が見える。小さな飛行場が近くにあり小型飛行機の着陸がすぐ目の前で見える。そして東側にはまだ雪渓の残る山並みが見える。残念ながら本日は曇天で雲が低いので遠くの視界は良くない。

ハットルグリムス教会という高い建物がある。鐘楼と大聖堂が一緒になったコンクリート建築で新しい教会である。鐘楼の高さは73m、先ほどのペルトランからも良く見え、市街地のどこからも見ることができるこの街のシンボルのような教会である。

中に入ると大きなパイプオルガンが鐘楼の下の部分の配置されている。この国の宗教はプロテスタントで福音ルター派だという。北欧はプロテスタントが多い。

ここでオプションツアーを離脱する。離脱に必要なサインをして勝手気ままに自由行動をし

て帰船することにする。市街地から船まで 4km ということで散策と運動にはちょうど良い。

離脱する旨を同じバスに乗り合わせた英会話教室のクラスメイトに伝えたと、彼らも離脱して結果 4 人での自由行動となる。

クラスメイトの連れが毛糸を買いたいということでまずは毛糸屋さんをさがす、毛糸は英語で何というか、辞書がないからわからない。誰かがニットだという。ニットストアはどこか聞きながら訪ね歩く。

後で調べたら毛糸はウール、ニットは編むということがわかる。それでも何とか買うことができる。

綺麗な街並みで、電信柱もなく看板も少ない。所どころ落書きがあるのは残念ではあるが、日本の同サイズの都市に比べるととても住みやすそうな街である。活気はあるが繁華街でも人で混みあっているのではなく、適度に人がいるという感じである。

そして街のオープンカフェで一杯飲むことにする。温泉にも入り喉が渇きビールをいただく、妻たちはホットチョコレートだ、こちらもおいしそう。欧米サイズで大きくて香りも良い。

街のスーパーマーケットに立ち寄り土産物になるようなものを探す。私たちは現地の生活を知りたいので、土産物も現地で食べているものや使われているものから選ぶ。そのほうが安くて良いものが手に入る。

ここでもアイスランドの国旗と名前が入った手ごろな帽子を見つけたので購入する。もちろん **Made in Iceland** である。最近はどこ土産物屋で買っても **Made in China** ばかりなので気を付けないといけない。

現地通貨に両替してないので、全てクレジットカードの買い物である。クレジットカードの普及は日本よりも進んでいる。ヨーロッパ全体でもそうであるが、北の方ほどその傾向が強い。北欧はユーロを使用していない国が多く、南欧は皆ユーロが使えるので南欧ではユーロを使っていれば良かったが、北欧の国々ではみな違う通貨なので、いちいち面倒くさいのでカードで買うことにしている。

ホフディ・ハウスという有名な建物が海岸に面して建っている。何で有名かというと 1986 年に冷戦終結の会談を当時のアメリカのレーガン大統領とソ連のゴルバチョフ大統領が行った歴史的な場所だからである。

とはいうものの小さな白い 2 階建ての家で、個人宅でもこのくらいのサイズならありそうである。

そのような歴史的会談がなぜ NATO 加盟国のアイスランドで開かれたのか、不思議である。推測するに地理的にはアメリカとソ連の間くらい的位置だからというのと、辺境の島という警備のしやすさの面からかもしれない。この国はヨーロッパ大陸から離れて存在するので独自外交政策を展開していたのかもしれない。

海岸通りを 30 分ほど歩く、自転車道路と歩道が白線で分かれているが、4 人が横一線で歩いていたので後ろから来た自転車に注意を受ける。ここは自転車道路だとしても言ったのか、この国も自転車が市民権を得ている。

それにしてもとても綺麗な海岸通りなのに人とはほとんど会わない。人口密度が全く違う。

■北極圏突入

船内新聞によると本日の日の出は 2 時 39 分、日の入りは 24 時 44 分ということで初めて翌日にずれ込む。アイスランド出航後も北上をしており北極圏をかすめるような航路をとっている。

夏至に北緯 66 度 33 分以上の北極圏に入れば白夜になるはずで、まだ 6 月 10 日なので夏至までは少し日がある。それにして夜の時間は 2 時間ほどで、この間も太陽が出ていないだけで完全に暗くはならない。

午前 10 時頃に汽笛がなり、船内放送が入る。北極圏に突入したという。北極圏を体験しようと多くの乗客がデッキに出ている。さすがに北極圏は寒い。海水温は 0℃、気温は 7℃である。

私は昨日アイスランドで購入した土産用の毛糸の帽をかぶり、妻はフィンランドで購入したミンクの帽子をかぶっている。いかにも暖かそうである。

クジラが見えるという情報が入る。私も潮が噴き上げの見えるが本体は確認できない。何人かの人に聞くと尾ひれを見たとか、様々である。話にも尾ひれがついている。

15 分くらいして舵を左に切る、後部デッキにいたので航跡が左舷に残っていくことがわかる。船用語でいうと左旋回なので取り舵である。わずか 30 分ではあるが貴重な北極圏体験をすることができた。

北緯 66 度 33 分が今回の航海の最北端になり、これからは基本的には南下するので日が短くなっていく。ということは本日の日の出、日の入りが今回の航海ではもっとも早く、最も遅い。

昼がこんなに長いと江戸時代までの日本の時刻表示では大変なことになると、いらぬ心配をしてしまう。その理由は昔の日本は昼を 6 等分、夜を 6 等分しており、一時（いっとき）はおおよそ 2 時間になる。だからこれをここ北欧に当てはめると同じ一時でも昼と夜、夏と冬でとんでもなく長さが異なる。

一日を 12 等分していればそんなことは起きない。昼と夜の時間にあまり差がない日本ではそれを考慮する必要がなかったのであろう。

ちなみに日の出の時刻が卯の刻で以降は辰、巳、午、未、申、酉の刻で日没になる。だから昼の真ん中を正午と呼ぶ。夜も同様に酉から始まり戌、亥、子、丑、寅、そして夜の終わりが卯の刻になる。したがって昼と夜の長さが大幅にくずれると成り立たない。

■流氷の海

船の進路はグリーンランドの南端を目指している。間もなくすると流氷の水域にはいるという。部屋で寝ていて何気なく窓の景色をみていると、小さな氷が浮かんでいることに気が付く。そうしたら徐々に大きな氷が見え始める。

デッキに上がってみると、大きな流氷がいっぱい迫ってくる。大きさは小さいものから大きいものまでさまざまであるが、大きい氷は直径 20m くらいある。氷の皿のようなものである。厚さはそんなにはないが厚いものでも 3m くらいであろう。色は白を基調にエメラルドグリーンに見える。厚いものほどエメラルドグリーンの色が強い。

北海道でも流氷を見ることができるとは、私が以前北海道でみた流氷とは違う気がする。何とな

く神秘的な感じがする。

その氷に青や赤の模様のような落書きのようなものを見る。どうやらこの船が氷にぶつかって氷が割れるので、青は船の底の青いペンキがはがれて付き、赤いのは錆のようである。

北極圏の後は、流氷の海とはなかなか素晴らしい演出である。北極圏は意図して突入したので船の演出としても、流氷は嬉しい誤算かもしれない。

乗客は寒さの中でも写真ばかり取っている。クルーも同じである。クルーはインドネシア人が多いので、彼らにとってはまさに生まれて初めて見る人も多いかもしれない。



部屋に戻り、部屋の窓からしばらくの間、妻と二人でぼんやりと流氷の海を眺める。船が進んでいるので流氷が右から左へと次々に移動していく。大きいものや小さいものなどさまざまな流氷が通過していくのを見ていると今までの人生で出会った人や、出来事のようにも感じる。

ある時その移動が止まる。四方を流氷に囲まれたようで、船が停止したのだ。このまま閉じ込められて抜け出せないのかという心配をしたが、後進と前進を繰り返して流氷が少ない部分探しうまく抜け出る。

後日、ジャパングレイスの事務局長からこの時の後進前進の繰り返しのことを聞く。当時船のブリッジはかなり緊迫していたそうである。船の先端と船尾にクルーを配置して両方の状況を聞きながら操舵していたそうで、最悪は閉じ込められるということも覚悟したようである。

ともあれ北極圏の通過、続く流氷という素晴らしい体験をさせてもらい感謝である。

■グリーンランドと天使の梯子と氷山

6月12日朝4時30分、グリーンランドの南端の岬、ケープ・フェアウェルに接近したという船内放送が流れる。

デッキに出てみると、陸地がすぐそばに見える。そびえ立つ深い青色の地肌の山の壁に雪の筋が何本も入っている。氷の島というよりはとほところろに雪が残ったアルプス山脈のように見える。陸地の手前には小さな氷山のようなものも見る事ができる。これがグリーンランドなのか、初めてでこれが最後かと思いつつ写真を撮りまくる。

雲の切れ間から朝の日差しが寒い北大西洋に照射して、天使の梯子が綺麗に見える。バックはグリーンランドの山並みであるから素晴らしい。

天使の梯子は気象現象としては薄明光線と呼ばれる。

天使の梯子以外にヤコブの梯子とも呼ばれている。旧約聖書創世の中でヤコブが雲の切れ間から差す光の梯子で天使が上り下りしている光景を見たと言われている。ヤコブは別名イスラエルともいい、ユダヤ教の民はヤコブの子孫と言われている。



しばらくして、前方に氷山が見え、徐々に近づいてくる。乗客へのサービスらしく氷山遊覧をしてくれている。

氷山というと三角屋根のような円錐形を想像していたが、これはテーブル型である。大きなテーブルは見えている部分で高さ 10m くらい、幅 50m はありそうである。色は白というよりは海面に近い部分は青白く、上の部分は少し汚れた白である。厚い氷の下には上の部分の 7 倍くらいが隠れているという。まさしく氷山の一角である。

そういえば、生まれて初めて本物の氷山を見ることに気が付く。



ひと通りのサービスを終えて船はグリーンランドを離れていく。グリーンランドはデンマークに属しているので、これでヨーロッパともお別れになる。本日で 62 日目なので日程的には半分を過ぎたところであるが、旅は次のフェーズに入った感がある。ヨーロッパを離れてカナダを目指す。いよいよアメリカ大陸である。

グリーンランドを離れて 5 時間、それにしても船の揺れが大きい。横浜を出航して以来、一番揺れていると思う。きっと船酔いをしている人も多い。

■北大西洋の航海は続く

本日は映画デーで船内イベントはなく、スタッフは皆ゆっくりと休んでいる。ただしクルーはいつものように働いている。クルーから実際に聞いた話では彼らには休日がない。

ハウスキーパーは朝 7 時頃からせつせと部屋の掃除とベッドメイキングをこなして、夕方になると廊下や階段の掃除をしている。

バーのウエイターも休みはないが、二交代になっており 11 時から 23 時までと 14 時から翌 2 時までで 12 時間労働である。そしてみな笑顔で一生懸命仕事をまじめにこなしている。教育がしっかりしているのかインドネシアの国民性なのかわからないが、誰に聞いてもクルーの働きぶりにはみな感心している。

若い女の子 3 人が私たちの船室に来る。この前のディナーで同席になった女の子たちと話していたら妻が作っているビーズの指輪の話になり、妻に習いたいということで妻が 3 人にビーズの指輪作りを教えることになる。

指輪は居酒屋仲間の G ちゃんが彼女とうまくいくようになったのでお祝いにあげようとして作っていたものである。

妻はビーズ作りを実の娘には教えたこともなかったが、娘よりも若い女の子たちに先生とおだてられて教えるのもまんざらでもなさそうである。こんなささやかな交流もこの船旅の良いところかもしれない。

6 月 13 日朝 0 時に時差調整が終わり、日本との時差が 12 時間になる。この船と日本ではちょうど昼夜が逆転していることになり、緯度は相当に高いが経度だけ見れば日本の反対側にいる。厳密には日本の裏側は、同じ大西洋でも北大西洋ではなく南大西洋になる。

ただ、私の時計は現地時間と日本の時間が同時に表示されるので、とうとう反対側に来ているだという実感がわいてくる。

■旅の達人に会う

朝食のテーブルでたまたま同席になったおじさんから声をかけられる。旅行は主にどんなところに行きますかと聞かれる。私の名札に旅のチカラ研究所の名刺をいれていたのを目についたと思われる。

こちらのことをいろいろ話していたが、どうもこのおじさんの方がいろいろ旅行に行っている感じがするので逆に質問をしてみると非常に驚いてしまう。いや、おじさんではなく横浜に住む旅の達人である。

1 年のうち半分くらいは海外旅行をしていて、去年は 13 回ほど海外旅行に行ったという。昨年行った中で良かった場所はチャドだという。チャドはアフリカ大陸のほぼ中央の国である。

何もない砂漠を 4 輪駆動車で移動するが、ともかくも砂漠に次ぐ砂漠をキャンプしながら 2 週間を過ごすという。本当に何もないのがとても良かったという。

チャドに行くきっかけとなったのがグリーンランド旅行で知り合ったイタリア人ガイドだという。チャドを真剣に勧めてくれたこのガイドを気に入ったのとチャドが面白そうだからで、その

ガイドと一緒にチャドへ行ったという。

今度はグリーンランドの話詳しく聞く。日本の旅行社が募った日本人 10 人くらいのツアーで老若男女がそろっている。

飛行機で着いた日はホテル宿泊であるが、あとはテント生活で 15 日くらい、テントや寝袋は旅行会社が用意してくれて、自分たちは着るものだけ持っていけばよい。グリーンランドとはいえ夏なのでそんなに寒くはなかったそうだが、気温は東京の冬くらいという。結構寒いとは思いますが、達人曰く普通に着込んで寝袋にはいれば問題ないという。

お客がテントを張りガイドが食事を作ってくれる。朝食はパン、コーヒー、ハムなど、昼食も夕食も似たようなものだそうである。水は雪解け水が豊富なので自然水を利用する。

トイレは男女ともにその辺でやるという。もちろんこっちの方が男で、あっちの方が女というくらいの分け方はするようである。移動はボートとトレッキングになる。とにかく大自然を満喫する旅で何もなし。ガイドは銃を持っていて非常時に使う。非常時とは動物との遭遇である。

そのグリーンランドにも日本人の 30 代の女性が住み着いており、夏は喫茶店を開いている。旦那はノルウェー人で、学校の先生だそうである。冬は猟に出てアザラシなどを銃で仕留めて革をはぎ、肉を食べ、燻製にして生活を立てているという。さすがに達人もそこに住もうとは思わなかったという。

このような体験型の旅は、何がいいのかは体験しないとわからない。私も極寒キャンプに毎年行っているが、一緒に行った人は必ず来てよかったと言ってくれる。

達人は 64 才まで働いていて仕事でも海外に行っていたが、本格的に旅行に行き出したのはその後という。

最初は奥さんと一緒にニュージーランド、イタリア、スペインなどの観光目的の旅行をしていた。大体は一各国一カ月というのが旅行期間で、着いたその日だけ予約していたホテルに泊まり、その後はペンションやモーテルに泊まる。交通手段はレンタカーを借りることもあれば電車やバスの時もある。

奥さんが亡くなってからここ 10 年ほどは大自然をめざすようになり、グリーンランド、南米、エチオピア、南極などに行っている。あまり無理はしないように命の不安になるようなことはなかったという。

達人のことをもっと知りたくなり、年齢を聞いてみる。すると逆に何才に見えるかと問われる。私はパッと見た目で 65 才、妻は 67 才と答える。達人曰く、皆には 67 才と言っているというが、本当は 12 を足した 79 才ということで更にびっくりする。50 代といっても通りそうである。

達人は見た目も若く、T シャツ一枚である。筋肉が落ちたと言いつつもいい体をしている。ちなみに現在は北大西洋上でそれなりに寒くて私はヒートテックを含めて 4 枚も来ている。

健康の秘訣を聞くと玄米を食べているだけだという。残念ながらこの船では玄米は食べられないのでご飯を食べずに野菜、魚、ハム、卵を多く取っているという。

この船に乗ってからはスペイン語会話の教室にも行っているという、私が行っている英会話教

室のスペイン語版である。なかなか覚えられないと本人は言っているがその意欲や向上心に敬意を表する。

国内旅行にも行くが、友人が企画する旅に便乗するだけで、とにかく体が動く間は大自然がテーマということらしい。そうするとどうしても海外になるかもしれない。

お金はどうしているのかと妻が聞くと、年金と蓄えでまかなっているというからちょっと信じられない。私も年金や資金運用のライフプランを見直さなくてはと思う

今後の旅の計画を聞くと、グリーンランドの東側とアマゾン川クルーズが当面の目標になっている。とにかく体が動くうちは海外の自然に挑戦したいという。

話をしていると思うのはすごく自然体で気負いがなく、人生を楽しんでいるように感じる。

■他にもいた旅の達人

別の旅の達人に会う。昼食で同じテーブルになった埼玉に住む旅の達人である。

46日間かけて埼玉から長崎までを全て歩いたという。泊まる場所は健康ランドやサウナで、野宿もしたという。

野宿などしているとトラブルも多い。一度パトカーを呼ばれたことがあって警察署まで行くことになったという。歩きにこだわったので歩き以外の手段は取りたくなく、パトカーに乗ると徒歩の旅から外れるので、同じ場所まで戻してもらえないかと頼む。しかし、断られたためにパトカーには乗らずに歩いて警察署までいくことになったという。

私たち夫婦は1週間程度の歩き旅しかしたことがないのに旅のチカラ研究所を名乗っていることが恥ずかしくなる。この船の中では少し謙虚にしておこう。

彼はこの船のリピータで、地球一周の船旅だけでも7回も乗っており、2018年のオセアニアクルーズと2020年の新船での地球一周クルーズの予約もしている。

きっとその他の旅もたくさんしていることだと想像する。そんな人たちともう少し旅の話を聞いてみたくなる。

この船は派手な人、鼻につくような人、そしてモラルの低い人が先に目につくが、静かに楽しんでいる人をちょっと探してみるとこの人のような人たちもいて、本当にいろいろな人が乗っている船ということを実感する。こんなすごい人と話すことができこの船に乗った目的の半分くらいは達成したような気持ちになる。